

bhatakale upaṭhite——パーリ仏典における「誤訳」の一例——

矢 島 道 彦

本稿で取り上げるパーリ仏典の一句は、かつて Oldenberg の「Akhyāna 理論」をめぐる論争の中で、一度議論の対象となったことがある。より正確にいえば、その議論は句自体の解釈等をめぐるものではなく、いわば、その句の「文脈上の整合性」といった問題に関するものであった。以下では、先ず Oldenberg と Franke の議論を瞥見して後、未だ決着のついていない問題の解決のために、新たな視点を提示することとしたい。

パーリ Jātaka は、韻文と散文から成る古代インドの文芸を往時の形態のままに伝え、言うまでもなく、Oldenberg の Akhyāna 理論を支える重要な証拠資料となった。しかし、注釈書が伝える「散文」の成立は遅く、古く Akhyāna のそれを保っている訳ではない。これも Oldenberg にとっては自明のことであったが、しかし Franke は、そのような韻文と散文の時代的隔絶を受け入れようとせず、むしろ両者の關係を極めて「緊密なもの」と考えた。そして、その緊密性を

明示する具体例として掲げたのが、「問題の句」を含む二つの Jātaka (J 539: Mahājānaka-jātaka と J 507: Mahāpola-bhanajātaka) である。

J 539⁽²⁾では、主人公が Thūna の町に入り、行乞しつつ矢作りの家の戸口に至る。このくだりは「散文」である。次に一つの「韻文」(v 163) が来て、その第一行に「矢作りの家において (koṭṭhake usukarassa)、食事の時間が来た時に (bhatakale upaṭhite)」と言われる。これは「從属節」のようではあるが、しかし主文は見当たらず、全く文をなしていない。Franke が問題にしたのはこの「不完全さ」である。かたや J 507 の場合⁽³⁾を見ると、bhatakale 云々の句が、先行する句 (so tassa gehaṇṇaṃ pāvekkhi) と共に一つの完全な文を作っている（彼は食事の時間が来た時に、かの者の家に入った）。そこで Franke は両者を比較して、前者の不完全な行は、実は韻文ではなく、散文の中にその主文 (pavistva... gehadvāraṇṇaṃ patto) を持っていると考えた。そしてこれは、散文に結びつ

く要素が韻文の中に「場違いに」置かれている一つの事例であり、Jataka の韻文が現に伝えられている散文の影響下にあることの明らかな証拠であるとした。

これに対して Oldenberg は、J 539 における問題の箇所は散文の影響下に「場違い」に置かれたものではない、と反論するが、その言い分は大略次の通りである。先ず、主人公がそこで矢作りの家を訪れたのは、インドの苦行者の一般的風習にならって「食物を乞う目的で訪れた」のである。それ故たとい表現は不完全でも、何ら韻文の中の表現として不自然なものではない。更に、沙門やバラモンが「食事の時間が来た時に」(bhattakale upatthine) 在家に物乞いに行くことは、Suttanipāṭa (Sn 130) にも言われている。いやむしろ、その有名な Vasala-sutta の詩文から、同じような場面のこころ「引用」されたものではないか。不完全な表現も、「引用」によって生じたのではないか、と想像した。

二人の主張は右のようなものであるが、先ず Franke の見方が、Jataka の韻文の二次的性格を考える場合には、ある重要性を持ち得ることは確かである。韻文は時として物語の変更などに伴う改変を受ける。そのような場合、韻文は明らかに散文の影響下にあると言えるからである。しかし、今の場合は果たしてどうか。一方 Oldenberg は、Jataka の散文の新しさを確信して Franke の所論を斥けたものの、その説明

はいささか説得力に欠ける。文としての不完全さの理由をよく知られた古い詩句の「引用」に求めるといふ説明の仕方に、万人を納得させるだけのものはない。

ところで問題の句は、文法的には bhattakale と upatthine の二語が共に「処格」で、いわゆる Locative absolute を形成する。訳せば「食事の時間が来た時に (when mealtime has come)」という程の意味である。Franke も Oldenberg も、詩句の解釈そのものについては何も問わず、このような理解を共通の前提として議論した。確かに、句の解釈には全く問題はなさそうに見える。唯一無二の解釈方法であるように思える。がしかし、それは与えられた文言を、「バーリ語」という枠の中で考えればの話であって、もしもそのような枠を取り外したらどうであろうか。このような問いはかつて一度も発せられなかったが、今の場合、実は問題の解決のために極めて重要な問い掛けであると、筆者には思われる。

Oldenberg は、Franke への回答に当り、「(いいでながら)」と注記を付して次のような示唆を与えている。問題の箇所には「元来は kotthake の語が構文上属するような hemisich (例えば注釈書が補う aññasi の如き) があったのかも知れない」と。思うに、そうした別の文要素を想定することは自由である。しかし仮にそのような文要素が本来有ったとしても、確認の手だてが有る訳ではないし、所詮は全くの想像に

過ぎないであろう。それならば、我々はむしろ、失われた何らかの文要素を求めることを放棄して、次のような推理を行った方がより現実的と言えるのではないだろうか。たとえば、問題の箇所の不完全さは、パーリ語への翻訳の過程での誤り、つまり「誤訳」に起因するのではないかと。

仏教の原聖典の言語の問題を扱った Lüders の研究書⁷⁾には、東方の言語からパーリ語へ、主格単数の *e* が誤って写し替えられたと思われる事例が列挙される (§§12-13)。今、問題の句の *upaithie* の語も、東方の言語における「主格」単数の *e* が誤って「処格」と取られ、パーリ語へ誤訳された例の一つと見ることは充分可能であろう。つまり、語末の *e* は本来は主格単数だが、誤って処格と解され、その結果 *upaithie* の形が残ったという見方である。仮にこう考えるなら、問題の句はもと「(かれは矢作りの家に) 食事の時間に近付いた」と訳すべき「一つの完全な文」であったことになり、表現の不完全さも無理なく説明出来るのである。

実は、動詞 *upa-stha* の過去分詞形を *active* な意味に用いる右のような用法が、問題の句にとって本来的なものであることは、現存する資料より充分確認出来ることである。たとえば Oldenberg の触れた Sn 130 では、その注 *Paramatthajotikā* に「異本の読み」として *upaithian* (「近付いた」) が示される⁸⁾。この方が構文上も理に叶っているばかりか、漢訳

の諸本⁹⁾からもその読みの正当性が支持されるのである。最近の Norman 訳も含めて、従来の訳書はいずれも *upaithie* の読みに従っているが、多分 Pj の異本によって、「バラモンであれ、沙門であれ、食事の時間に近付いてきたものを」云々と訳すのが正しいと思われる。本来 *-am* という「対格」であったとするなら、一体 Sn の *e* という読みは何処から来たのか。恐らく詩句の貸借関係は、Oldenberg の考えたとは逆であると考えられる。つまり、Sn における二次的な *e* の形こそ、*Jataka* の偈などからの「引用」あるいはそれを使い浮かべた伝承者による「書き換え」であろう。

ちなみに、出家が食事の時間に「近付いた」(*upa-stha* の過去分詞形) という表現は、*Jaina* の聖典文献にも散見される¹⁰⁾。しかも韻律 (*Shloka*)、位置 (*uvaitthie, uvaitthio* が句の後半四音節を占める) など、パーリの場合と共通しており、表現の古さを窺わせる。

以上、かつて *Akhyāna* の論争の中で議論された一句について私見を提示したが、右の仮説が正しいものとすれば、Oldenberg の *Akhyāna* 理論を突き崩すべく持ち出された議論の種も、実は全く的外れのものであったことになる。また一方、Oldenberg の理論は、それによってかえってより強く固に守られる結果ともなるのである。

- 2 J No 539 (Vol VI) Pavasivā ca pana Mahasatto piṇḍaya caranto usukārassa gehadvāraṃ patto,...
v 163: koṭṭhake usukārassa bhatakalē upaṭṭhite
tatra ca so usukāro ekaṃ ca cakkhu niggaṃṇha
jīṃham ekena pekkhau.
- 3 J No 507 (Vol IV) v 19:
ath' ettha isi-m-agañchi samuddam upar tpari,
so tassa gehaṇ pāvekkhi bhatakalē upaṭṭhite.
- 4 H. Oldenberg, "The prose-and-verse type of narrative and the Jātakas" ("The Ākhyāna type and the Jātakas", Two essays on early indian chronology and literature, part II), *JPTS* 1912 pp. 19-50 [originally in German], esp. pp. 23-26.
- 5 Sn 130: yo brāhmaṇam vā samaṇam vā bhatakalē upaṭṭhite
roseti vācā na ca deti, tam jaṇṇā 'vasalo' iti.
description seems to have suffered while being handed down. Before or after the hemistich koṭṭhake, etc., there will have been a hemistich to which koṭṭhake structurally belongs—say, with an aṭṭhāsi, as the Commentary has it.
- 7 H. Lüders, *Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Uṭkanons*, Berlin, 1954 §§ 12-19c: Nom. Sg. auf -e falsch aufgefagt).
- 8 Pj.: bhatakalē upaṭṭhite ti bhojanakālē jāte; upaṭṭhitan ti pi paṭho, bhatakalē agatan ti attho.
- 9 (1) 沙門婆羅門 如法來乞求

bhatakalē upaṭṭhite (矢 島)

- 呵責而不与 当知領群特 (雜阿含) 一〇二大正二・二九上)
- (2) 沙門及与婆羅門 貧窮乞餽請向家
不与飲食亦不施 如是亦名旃陀羅 (別訳雜阿含) 二六八
大正二・四六八上)
- 10 Utt 12. 3cd: bhikkhaṭṭha bambahajjāmi jannavaḍe
uvaṭṭhio

Utt 25. 5cd: Vijayaghosassa jannammi bhikkhaṭṭha

uvaṭṭhio

〈キールド〉 パーリ仏典、誤訳、Ākhyāna 理論

(東京大学非常勤講師)

掲載されなかった諸氏の発表題目 (1)

Matsyapitrāna 研究 松原爾 (北海道大学大学院) Mahadeva-
pūjāに用いられる mantra について 永ノ尾信吾 (国立民族学
博物館) Sivadvaia の研究 平岡昇修 (花園大学) Jayanta
の pratyakṣa 論 II 島義徳 (帝塚山学院大学) 不二元論学派
の認識論『バーマティ』を中心として 島岩 (愛知学院大学)
kṛyamaṣa (欠月) について 矢野道雄 (京都産業大学) 仏典
に伝えられる医療を構成する四部門 中田直道 (鶴見女子短大)
原始仏教における依 (upadhi) の語義に就いて 服部弘瑞 (大
谷大学大学院修了)